あざみの歌

「安、保、反、対。安、保、反、対。岸、を、倒せ、岸、を、倒せ…」

浜田安次郎は、大規模なデモ行進が市役所前の大通りを埋めていて、向側にある電車の駅に到達できそうもないと判断した。この春、校長を最後に教員としての道にピリオドを打ち自由の身分となった今、帰宅を急ぐこともない、それに少し疲労を感じてもいたので、一休みしていこうと気持を切り替えた。

馴染みの書店の中を通り抜け、裏口に併設された喫茶店に入っていった。その喫茶店は、本を買った人たちが新たな本の香りを楽しみながら、ページを解くことも多い店であった。

お気に入りの窓際の席が空いていたので、そこに腰を下ろして、

「サントス」と好みのストレートを注文した。

窓からは青空が広がって見え、緑の大きな葉を揺らせているプラタナス並木がうかがわれた。置かれたお冷やをぐっと飲みこむと気分がすっと落ち着いた。デモ隊の声が相変わらず聞こえてきた。安次郎は思った、

「安保反対のデモねえ。俺の時代にゃ、こんなことはおよびもつかなかった。全てが戦争だった。蛸壺にもぐって好きなことをやる以外、全てが戦争だった。終戦後は大変わりだった。何かにつけ戦時中のことと比べるのが癖みたいになってしまって、

戦時中との関係抜きには何事も考えられなくなった。それにしても、大変な時代だった」彼の脳裏には、県の西端にある湖のほとり、故郷の村で過ごした時代が浮かんできた。

安次郎が生まれたのは明治三十五年の夏、鮮満をめぐって戦争の気配が漂い始めた頃であった。父親は、半農半漁の村で生まれ育ち成人し、内湾で漁師をしながらわずかばかりの田畑を耕す百姓であった。母親は、学校に行く機会を得ず、ただ農家の家事を助けて過ごしてきた後、嫁入りしてきて、その後もひたすら父を助けて家を切り盛りしていた。

安次郎は、尋常高等小学校を入学から卒業までほとんど首席で通すほど良くできた。父母はそれを喜び、内心得意にしていたが、卒業後の進学など考えたこともないのであった。なぜなら、当時、その村から百姓の子どもが中学に進学することは、ほとんどあり得なかった。安次郎も、尋常高等小学校高等科を終えると、父の手ほどきを得て舟の櫓を漕ぎ、田に畑に鍬を入れ百姓仕事に精を出していた。海陸で働く合間に、家の近くにある安楽寺に行っては発刊されて間もない「少年倶楽部」「日本少年」などを読むのが何よりの楽しみだった。

喫茶店のスピーカーからは日本歌曲のピアノ演奏が流れていた。「あざみの歌」が流れ始めると、彼の思いはスッとそれに引き寄せられた。アザミの花に、彼は何ともいえぬ親しみを感じていた。偶然なことではあったのだが、彼の人生の節目にア

ザミの花が顔を出すのであった。

「あざみの歌」の演奏をバックに、安次郎の思いは青春時代をたどっていった。尋常高等小学校を卒業して自家の仕事を手伝い始めた頃から師範学校で勉強していた時期が、いちばん順調で幸せな時期だったと安次郎は思うのであった。最初にアザミの花が顔を出すのは、安次郎が高等科を卒業して一年ほど家の手伝いをしていた夏の日であった。

その夏のある日、「少年倶楽部」の最新号を読み終わって寺を出ようとすると和尚さんが、

「安次郎、ちょっとこい」と庫裡の方から声を掛けた。

「和尚様、何でしょうか？」

「安次郎、お前は、H市の師範学校に行く気はないか？」と聞く。唐突な話だし、師範学校などというものを知らなかったので

「和尚様、おら分からんだに」と言うことしかできなかった。

「いきなり言われても困るわなぁ。師範学校ってのがちょっと前に出来てな。そこでは、高等科を終えた生徒なんぞを集めてな、学校の先生になれるように勉強させて、あちこちの尋常小学校に先生として送り込もうってんだ。師範学校に行ったらな、勉強がたんとやれるでなぁ。お前は、勉強がすきだから師範に行って、もっとたーんと勉強しろ。そうして、勉強したことを山ほど持って帰って尋常の訓導になるんじゃ。お前は、勉強が良くできるから、きっと立派な訓導になれる。親爺によく相談

してみろ」
「和尚様、俺、父ちゃんに聞いてみるだに」安次郎は、勉強がたんとやれるというところにこの上ない魅力を感じて浮き浮きしてきた。
「返事は急がんけど、この夏の内に決めにゃいかんで。そうでないと、考査に間に会わんでの」
「うん」考査なんかがあるんだ、と安次郎は思った。
安次郎は、家に駆けて帰ると、ちょうど網をかかえて帰ってきた父親にそのことを伝えた。
「和尚さんがそういいなさったか。儂もなぁ、先だって、和尚さんからそのことを聞かされてな」と言って、手ぬぐいの鉢巻を取って首筋の汗をぬぐった。安次郎は、
「なんだ、父ちゃんは知ってたんか」と思った。父ちゃんは続けて、
「おみゃあは、勉強が好きだし、よくできるこたあ知っとる。でもなあ、百姓の子が上の学校へ行くってこたあ、この世にゃあ、無いずらよ。おみゃあは長男坊だし、田畑を守って、米や稗をたんと作るのがおみゃあの仕事よ」
「やっぱりそうだよな」と安次郎は心で思った。安次郎は、高等科を終わったとき、これっきりで勉強も終わるのかと思うととても空しい気持になったものであった。上の学校といえば、その村の周辺ではH市の中学校であったが、村からその中学校に行って勉強を続ける子どもは少なく、お寺の息子、庄屋の息子、医者の息子、小学校の先生の子どもくらいだった。父ちゃ

んの言葉に、こころの中では泣き出しそうになったが、それを顔に出さないよう努めながら、いつもと同じに網を拡げ竹竿に掛けて乾かす仕事に打ち込んでいった。

「師範学校のこたあ、明日（あした）、和尚さんに断ってこい」

夕飯が終わったとき、父ちゃんが言った。安次郎は、何も答えなかった。父ちゃんは続けた。

「おみゃあは長男なんだから、ちゃんと家を継ぐことを考えろ」

安次郎は何も言えず、沈黙がその場を覆った。少しして流しから母ちゃんの声がした。

「家を継ぐったって、大した田畑があるわけじゃなし。家にゃ、安彦も安男もいるだし、三人のうち誰かが継ぎゃあええずら。万が一、みんな継げなくったって、うちゃ、そんなに田畑があるわけでもなし、その分、違う仕事で食っていけりゃあ、これからの世の中、それでもええずらよ。勉強していろんなことを身につけるこたあ、ご維新このかた、役にたつようになったずら」

近年、この村からもH市やT市に働きに出る次男、三男や娘たちが増えていた。日清戦争が勝利で終わった頃から、近在の街では織屋が増え、自動織機を備えた工場も増えてきていた。

「兄ちゃん、また、勉強するのか」と聞いたのは高等科に通う次男の安彦だった。尋常科の安男は黙って話を聞いていた。

母ちゃんの言ったことは安次郎の心に灯を灯した。彼は、思

い切って父ちゃんに向かって言った。
「父ちゃん、俺、勉強したい。勉強して尋常の先生になって帰ってくる。師範にやっておくんな」
「身分を考えろ。訓導なんてのは、庄屋様の息子かお寺の息子がなるもんだ。水呑百姓のすることじゃあない」
「父ちゃん」と母ちゃんが流しからこちらに向き直って言った。
「身分ってものは、ご維新でなくなったずら。そのこたあ、お寺の和尚さんが、何かのときにいつも言ってることだに。これからあ、誰でも、自分に一番合った仕事を探してやっていく時代だって和尚さんは言っとった。父ちゃんは、まだ、江戸時代の頭のままだなあ。安次郎に何が一番合った仕事だか良く分かんにゃあけど、勉強が好きなこたあ確かだ。これからも勉強したい気持がありゃ、百姓の倅にゃ、師範くらいしか行くとかあにゃあずら。なあ、安次郎、おみゃあは本当に勉強がしたいずらか」
「うん」彼ははっきり言った。安彦が口を挟んだ。
「兄ちゃん、師範に行きゃあ良いじゃん。百姓は俺が継があね。兄ちゃんは不器用だし、俺は兄ちゃんより学校の成績は下だけど、兄ちゃんより器用で畑仕事も上手いずら。米や野菜を作るのは面しれえしよ」
安彦の声は、いつもより一段と高い声だった。安次郎は、足は俺が速いが、手先は確かに安彦が器用だなと思った。父ちゃんは、何にも言わずキセルに煙草をねじ込んで、たばこ盆の消し炭から火を移して、スーッと一息吸い込んだ。

それから二、三日、父ちゃんと母ちゃんはそのことでなんだかんだとやり合っていた。しかし、和尚さんの講話で得た知識を使った母ちゃんの主張は鋭く、父ちゃんには勝ち目がなかった。安次郎の勉強好きは、ひょっとすると母ちゃんの血を引いているのかも知れなかった。

ある日、畑へ行きがけに父ちゃんが、

「安次郎、おみゃあが、本当に勉強をしたいんなら、師範に行きゃあいい」と言った。

「本当か、父ちゃん。じゃ、和尚さんに、俺、師範に行きたいっていってくる」

彼は、かけ出して行った。心臓がどきどきして飛び出しそうだった。

寺の境内に駆け込んでいくと、和尚さんが、庫裡から母屋のほうに歩いてゆく姿が目に入った。安二郎は、だいぶ手前から、

「和尚さーん」と声を掛けた。

「おー安次郎、どうなった？」

「うん、父ちゃんが師範に行っても良いって。母ちゃんが父ちゃんを言い負かしただに」

「そうか、そりゃ良かった。母ちゃんのほうが世の中の動きを知っとるでなあ。儂の話をよう聞いとるからなあ」と言って、朝からの暑気を団扇でばたばたと追い払いながら母屋の縁側に腰を下ろした。

「お前の父ちゃんにもな、この間、このことを話しといた。そ

の時ぁ、父ちゃんは、安次郎はうちの惣領だからと言ってなさった。儂はな、安次郎ほどに勉強が好きで良くできる子はそんなにおりゃせんぞ、そんな子をこのまま百姓にしておくのは惜しい、と言って師範行きを薦めとったんじゃ。そうか、父ちゃんも行けって言ったか。そりゃ良かった。そりゃ良かった。そうしたらな、儂が書類を取り寄せてやるで一週間ばかり待っとれ」

「はい。和尚さん、そいで、師範って、どんな勉強するだかね」

「ああ、そうだな、じゃ、そこへ座れ」と母屋の縁側を指さした。そして、自分は、

「ちょっとまっとれ」といって奥へ姿を消した。

しばらくすると、桶をかかえて戻ってきた。

「こう暑い日にゃ、冷えたマクワウリがええ」そう言って縁側に腰を下ろし、マクワウリを包丁で縦に四つに切った。

「まあ、食え」とマクワウリを差し出した。

「ありがとうございます」安次郎は、夏の食べ物では、マクワウリが一番好きであった。

「師範はな、尋常高等小学校の先生になるための学校だ。ということは、尋常で教えることはみんな知っていなきゃならん。読み書きそろばんのほかに、歴史や地理、修身や体操も教えなきゃならん。だから、そんなものを深ーく勉強する。深ーくということはな、ええか、尋常の勉強時間に先生が話すことの何倍ものことをしっかり勉強するってことだ。

「安次郎、マクワが水に浮いとるだろう。水の中に沈んでる部

分は水の上に出てるのよりずっと多かろう。さっき、深ーく勉強するって言ったが、これと同じで、訓導が教室で教えることは、この水の上に出てるところだけじゃ。水の上にこれだけ出るためには水の下にその何倍もの部分が深くまで沈んでなきゃならん。深く勉強するってのは、水の下に深く入ってる分まで勉強するってことだ。それがないと、教えられることも貧弱にしかならん」、安二郎は、和尚さんの話が、乾いた畑に掛けた水がスーッと染みこんでいくように脳みそに入っていくのを感じていた。嬉しくなって、縁側から垂らした足をぶらぶらさせながらマクワウリをかじった。庭に目を向けると、生け垣の手前に暑い日射しをあびて咲いている大柄な草花が目に入った。安次郎は、それを見たことはあっても名前を知らなかった。

「和尚様、あの花は、何という花ずらか？」

「あぁ、あれはアザミじゃ。いい花だ」

安次郎は、黙ったままアザミの花をじっと眺めていた。

「うん、ちょっと見た目には、きれいにゃ見えんかも知れん。でもな、近くによって良く眺めてみろ」ふたりは縁側を降り、生け垣のそばに寄った。

「どうじゃ」和尚が感想を求めたのに即座には答えにくかったが、安次郎は、薄紫が何よりも気に入ってしまい、それに加えてその色調が控えめなのも好もしく思った。

「儂は、アザミの花にはいろんなことがこめられているように思えて好きなんじゃ。だから、雑草なんだけども、こうしてところどころに残しとる。こいつは、荒れ地が好きなのか、よく

手入れした畑の回りにゃ出ないで、お前も見たことがにゃあずらよ。それに葉や茎が力強い」

「あっ、痛っ」と安次郎が悲鳴を上げた。

「葉っぱに触ったな。アザミの葉には棘がある。折採ろうとするものは容赦なく刺す。控えめなんじゃが、自分で自分を守る強さがある。そこも立派じゃと思う」

安次郎は、今でも、その時の指の痛みを思い出すことが出来た。安次郎の思い出は、師範学校の日々に移って行った。

安次郎が師範学校に通った時代（大正九～十三年）は、ちょうど大正デモクラシーの時代であって、多くの知識人や作家がたくさんの本を書き自由に言論をたたかわせていた。文化の面では、大正ロマンといわれる動きも盛んであった。師範学校の学生も寮生活の中で、夏の西瓜泥棒や冬のミカン泥棒などいろいろないたずらもしたが、安次郎はこの時期、野球の面白さを覚えた。

Ｈ師範学校は全国中等学校選手権大会に、常連のＳ中学やＨ中学と並んで出場を競ったものであった。安次郎は、師範での最終年にはＨ師範チームの一塁手、五番バッターとして先発出場し活躍したがＳ中学には全く歯が立たなかった。当時のＨ師範の野球チームは冬になると開店休業で、ほとんどの選手は別のことに打ち込んで過ごすのであった。彼は、そういう季節には、和尚さんの深く考えるべしということばを思い出しては広

く深く本を読み、また仲間と議論に耽った。

安次郎は、大正デモクラシーの中心である政治的自由、民本主義、マルクス主義などよりは、哲学的、文芸的話題に関心が強く、倉田百三「出家とその弟子」をめぐって、仏教とキリスト教との相克、恋愛と性欲との矛盾などを議論し、武者小路実篤の小説を評し、「美しき村」の是非を論じユートピアの実現を探った。師範の卒業にあたっては、倉田の「愛と認識との出発」で絶賛された西田幾太郎の「善の研究」を購い、教員としての最初を知的高揚をもってスタートさせようとした。

安次郎の社会へのスタートは、知的高揚をもって、という思いとは違って、T市にある歩兵連隊に入隊し基本的な軍事訓練と兵営生活を体験することをもって切られた。当時、ほとんどの新任教員は、訓導の辞令をもらうと同時に一年間の兵役に就いていたのであった。これは、当時の兵役上の制度のひとつであり、義務教育に従事する教員に一か年の軍隊生活を体験させたうえで、未来の兵士である学童の育成にあたらせようとするものであった。

この兵役期間において、兵営内で師範出には一般兵とは別室があてがわれ、被服も上等なものが提供されていた。このような特別待遇には、軍隊生活が快適なものであるという印象を持つよう配慮し、教師の口を通じて軍隊は良いところである、という宣伝効果を期待していたのかも知れない。そのような快適な環境のもと、彼はその兵役期間においても「善の研究」を繰り返し読んでは、傍線を引き書き込みをして知的高揚を維持し

ようと努めることもできたのであった。

「善の研究」を通して、彼は、個人の意識の根底にあってその言動を大きく支配する一般的意識としての「純粋経験」が何であるのか、を追い求めた。彼の精神的関心は、人生にいかに真摯に向き合うか、というところに向かっていたといって良いであろう。

兵役の満期除隊後、安次郎の教員としての実質的スタートは、郷里の尋常小学校ではなく、湾を挟んで対岸のＡ町の尋常小学校で開始された。ここで、二年間、新人教師としてのいわば見習いをして過ごしたのであった。

その後、予定通り、昭和二年に郷里の学校に赴任したのであったが、その時には、両親は勿論のこと、安楽寺の和尚も大喜びで迎えてくれ、安次郎もはりきって勤め始めたのであった。

郷里での五年間は、時々失敗をしては先輩や校長に叱られながらも、あっという間に過ぎていった。その間に、Ｈ市の知人の紹介で妻を娶っていた。

この時代の日本は、第一次世界大戦の後、ロシア革命とそれに続くシベリア出兵、米騒動、二度にわたる経済恐慌など、激動を経験していた。第一次世界大戦では、近代兵器の威力の前に多くの非戦闘員が殺戮され、それらを見た多くの識者の声を背景に、戦場となったヨーロッパを中心に軍縮の動きが高まっていた。しかし、日本は、そうした動きを知ってか知らでか、

若干の軍縮にお付き合いしただけで、日清、日露に続く軍事による対外膨張指向を強めていった。

そんな中で、安次郎は、子どもたちに教えることが何となく窮屈になってきていると感じていた。そのように感じ始めたのは、関東大震災の後くらいからであった。

関東大震災は、首都圏にとどまらず周辺各地に未曾有の被害をもたらし、生活にも大きな影響を与えたのであったが、それに便乗して朝鮮人や無政府主義者の暴動が企てられているというデマで、多くの人々が捕らえられたり殺されたりした。自由民権、大正デモクラシーと続いてきた民主主義的流れの上で普通選挙法が施行された反面、治安維持法が公布され、国体変革を企む者に対する取り締まりが厳しく罰せられるようになった。それらの動きは、学校で教えることにも気を遣う傾向を強め、教師は、とりわけ歴史の授業では、余計なことは教えるべからずという気風がみなぎってきた。

そうした流れの中で安次郎は、師範学校時代に寮で仲間と議論した教育の理想とのギャップを自覚していた。彼が、師範学校時代に勉強して特に気に入っていた小原國芳の「全人教育」では、教育の内容は人間文化のすべてを盛らなければならないとし、それにより児童の個性に応じた統一的人格の発達を目ざそうとしていた。その主張を今実践しようとすると、長幼の序、忠君愛国、皇祖高宗の遺訓などに偏った皇民教育の原則とぶつかることが多くなるのであった。したがって、歴史や修身の授業はいうまでもなく、読本の説明でも、唱歌の指導でも、教師

用教科書に示されていること以外、口外するのを憚るようになっていて、そこに違和感を感ずるのだった。それは、同僚の訓導も感じていることだったが、互いにそんなことを話題にする機会はほとんどなかった。

そうこうしているうちに、安次郎は、「全人教育」は棚に上げ、算術の教育法の研究に熱を入れるようになっていた。算術を教えるときには、そのような違和感をほとんど感じることがなくのびのびと考え、自由に教えることが出来るのだった。

安保反対のデモの声を遠くに聞きながら、安次郎は、その当時のことを思うと、歴史の流れの強大さを思い、個人の意志の小ささを感じるのだった。

彼は、その後、H市内の一尋常小学校に転任になっていた。その頃、師範学校に行っていた三男の安男が、卒業して郷里の村に帰ってきて訓導になり、日曜日には父の野良仕事を手伝っていた。

安次郎は、師範学校時代の野球の経験から、たまに師範の後輩達の試合を応援に行ったりしていたが、昭和九年に、全日本チームとアメリカ選抜チームが草薙球場で試合を行うということが野球仲間から伝わってきた。ベーブ・ルース、ルー・ゲーリックといったアメリカの大選手が見られるのは大きな魅力だった。京都商業を中退して全日本に参加している沢村栄治という投手はめっぽう球が速くて、アメリカ選手でもなかなか打て

ない、という噂もあった。仲間が切符を買ってきてくれた。

当日の草薙球場は良い天気で満員であった。試合は、予想に違わず沢村の速球がさえ渡り、三番ベーブ・ルース、四番ゲーリックを連続三振に取るなど、どちらも譲らず七回まできた。七回裏、ゲーリックに投じた球はジャストミートされセンターの外野席に吸い込まれていった。結局、この一点でアメリカの勝ちとなったのであった。安次郎は、一球一球、手に汗を握ってみていたのであるが、この試合の観戦は生涯忘れ得ぬ思い出となったのであった。

そのような催しは行われていたものの、時代は、その少し前から、柳条湖事件をきっかけに満州事変が始まり、満洲国建国の後、国連脱退へと動いて行った。二・二六事件を経ると軍部の力が大きくなり、大正末年に始まっていた中等学校の軍事教練にもいっそう熱が入るようになった。また、彼の教えた生徒の中にも、中学在学中に、陸軍幼年学校を受験しそちらに移って行く者も少なからず現れていた。

ある日、郷里の村の尋常小学校長から葉書が届き、安次郎の最初の教え子だった松下久男が戦死したと知らされた。安次郎は、人なつっこい久男の挙措を思い、その生涯が短かったことをこの上なく不憫に思うのだった。

教育勅語が下賜されたのは一八九〇年。かれこれ四〇数年が経ち、全国の学校では、それに則った教育が隅々まで行き渡っていた。奉安殿や御真影に最敬礼することも定着していた。当時の小学校の多くには、校門を入るとすぐに奉安殿があって、

その中に教育勅語の謄本が収められていた。登校した児童はまず奉安殿に最敬礼してからそれぞれの教室に向かうことになっていた。一尋常小学校の場合、校門を入ると左手に奉安殿があり、奉安殿に向かって右手が職員室になっており、職員室からは子どもたちの最敬礼する姿が見える仕組みになっていた。学校のすべてが教育勅語を中心に動いていた。

安次郎は、日本という国に生を得た幸せを、自然に恵まれた土地で、すめらみことを仰ぎつつ他民族から襲われることもなく長く築き上げてきた重厚な歴史に感じていた。近年の急速な国力の発展も、その歴史あってこそであり、その歴史をゆがめるような文明は、一見高等に見えても眉に唾をつけて見なければならない。その歴史の中心は万世一系の天皇である。天皇陛下を父以上に尊く、皇后陛下を母以上に尊く思い、その詔には何をおいても従い、日々、みどり豊かな国で生業に励み、一朝急あらば、剣を持ちて駆けつける、といった観念をいつからというのでもなく身につけているのであった。そのような感じ方は、安次郎たちの時代に教育を受けた日本人のほとんどが共有したものであり、それに疑いを持つ者は少数であった。

生徒に戦争を教えるにあたっては、お国のために戦って死ぬのはこの上なく尊いことであり、すめらみことに命を捧げること以上に美しいことはない、と多くの教師は言って、その例として、死んでもラッパを放さなかった小口木平を褒め、爆弾三勇士の事跡を話して聞かせたり、明治の大帝に準じた乃木将軍を讃えたりするのであった。

しかし、実際に教え子が戦死したという報に接すると、安次郎は、教えたことと矛盾する悲しみを覚え、やるせなくなるのであった。そしてその後、そのようなやるせなさを感ずる機会が少しずつ増えていくのであった。そのやるせなさを如何に考えるべきか、安次郎は、近年、書店の店頭に見かけるようになった「日本浪漫派」の思想などに、そのよりどころを見る思いがしていた。

彼の見たよりどころは、何かのために命をかけることの崇高さ、育んでくれた国土や多くの同朋のために命をも惜しまない精神の気高さ、それは日本古来の文化伝統の崇高さであり、それを命に替えても守ること、そこに浪漫をみる、といったところが中心をなしていた。この国は、その崇高なもの故に二千六百年にならんとする歴史を持ち、これからも弥栄であるべきであり、あるはずである。その国が、危機に瀕しているときに、命を捧げることはなんと尊い心持ちか。敵が白刃を持って襲いかかるときにそれを防がずにいて敵の手にかかるなら、それは犬死、戦わずして何が兵士だ。

安次郎のそうした観念は、「日本浪漫派」「文学界」などの雑誌や、保田輿重郎、亀井勝一郎などの文化人が書いたものをむさぼり読むことにより一層強いものとなっていった。

そんなある日、安次郎は、本屋に平積みされた本のなかに、カバーにアザミの花の墨絵をあしらった立派な本を見つけた。それが保田の新刊書であるのを認めると中も確かめずに購って帰った。それは「戴冠詩人の御一人者」であった。何日かの夜

がその読書に費やされた。その巻頭論文に描かれた倭武尊の、詩人と武人とが一体化された姿とその悲劇的生涯は、厳しい風に晒されて野に咲くアザミの花に似て、力強くも美しいものに思えた。詩人と自然はつながっているという保田の謂いをアザミに見た思いさえしたものであった。また、アザミの花のひかえめな美しさが古来の日本文化の姿に似つかわしく好もしいとも思えた。

中国戦線における日本軍の華々しい戦果がラジオや新聞で流されていたある日、やはり郷里のM尋常小学校を卒業して成人し出征していった今川喜六が、ひょっこり、満期除隊したところだといって学校を訪ねてきた。農家の次男坊だった彼は、卒業後、H市に出て大工として腕を磨いていたところを招集され北支に派遣されたと聞いていた。彼は、安次郎に会いたくなって来たのだといった。家族の安否などを話した後、ふた呼吸ほど沈黙した後、言った。

「先生、戦争はいやなところだ」

「う、どうした？」

「戦争は人を鬼にする」

「何があった？」

嘉六は、ぼそぼそと次のようなことを話して聞かせた。

現地におもむいた嘉六たち新兵は、「兵隊としての根性を鍛えるための実戦訓練」に臨むこととなった。行進して演習場に着くと、中国人青年が両手を後ろ手に縛られて並んでいた。訓練とは、それら青年を地面に立てられた柱に縛り付け、号令と

ともに、銃剣で突き殺すことであった。ワラ人形などを相手に行っていた訓練を実地に行う、というのであった。

青年たちは、柱に縛り付けられる前に必ず何かを叫んだ。後で分かったことであるが、これらの青年は、共産軍の捕虜であって、中国共産党万歳と叫んでいたとのことであった。この訓練では、柱に縛り付けられたひとりの青年に向かって、号令を合図に十人ほどの新兵が、

「わああーあ」とか

「ぎゃーっ」とか、わけもない大声を上げながら突っ込んで行き銃剣を突き刺した。大声は、上げないでいられなかったし、突くときにはほとんどの新兵は目をつぶるのだった。だから一回の突撃で死なないこともあった。すると、

「根性を入れて、やり直〜しっ」と、やり直しをさせられる。

この訓練が始まってから、中に、精神を病む兵も出たが、その場合はどこかへ送られて行って戻ってくることはなかった。嘉六は、ほとんどわざと失敗を繰り返してはごまかし続けていたという。はじめのうちは、就寝中、目隠しされた青年が夢に現れ、うなされて目を覚ますこともあった。しかし、こうした「実戦訓練」を繰り返すうちに、ほとんどの新兵もだんだん抵抗なくそれをやってしまうようになっていった。

転戦中は、敵との戦闘の合間に民家を襲い、食料を掠奪し、住民への暴行、殺生をすることも多かったという。話の中で、「みんな、鬼になって行く」と嘉六は何回となく言った。嘉六は、そんな経験を積み重ねながら満期除隊となり、予備役とし

て郷里に帰ってきたのであった。
「先生、俺は二度と兵隊に行きたくない」
「そうか、軍隊はそんなことまでやりだしたか」と言ったが、「天皇陛下の軍隊のすることじゃあないな」とは、心の内で思っても声に出して言えることではなかった。
安次郎は、その夜、嘉六の経験を思いながら、「皇軍に、何故、あのような『実戦訓練』が許されるのか、住民殺戮が許されるのか」と自問していた。しかし、保田輿重郎の敗北の美学に、乃木希典の自刃を重ね合わすことは出来ても、それら訓練や殺戮を読み取ることはむずかしかった。国際人としての、例えば岡倉天心のアジアはひとつという思想から、仮に中国が遅れた世界だとして、それから解放する戦争を日本がしていて、多少の犠牲がそこにはつきものだとしても、捕虜虐待や住民殺戮は「多少の犠牲」の範疇を越していると思わざるを得ない。
安次郎が、唯一到達した納得いく答らしいものは、あのような「実戦訓練」は、現場の下士官や将校の勝手な命令によるものであって、高級将校、ましてや天皇陛下の関与しないところの不法行為なのではないか、という仮説であった。これから、満期除隊で訪ねて来る者があったら聞いてみようと思った。
しかし、昭和十一年暮れに入営した兵隊からは、兵役法の改正により、在営期間が実質的に無期限延長となり、その後、嘉六のように満期除隊で挨拶に来る教え子はいなくなった。教え子の消息としては、ほとんど死を聞くのみとなった。
長女が生まれたのは、ノモンハンで戦闘が行われている時で

あった。

勤労動員が始まり、日独伊三国同盟が結ばれ大政翼賛会が発足すると、世は全て戦時色になっていった。尋常小学校は国民学校と名を変え、教科は、国民科、理数科、体錬科、芸能科という四教科に統合された。国民科は、修身、国語、国史、地理を統合し、芸能科は音楽、習字、図画工作、裁縫を統合したものであった。学校行事や団体訓練が重視され、太平洋戦争への総力戦の体制に対応して言行一致・心身一体の皇国民錬成を目ざすものとされていた。

次男の安彦に赤紙が来て出征していった。一家の主人とその後継者は招集されないという徴兵免役の原則から兵隊に行かず農業に勤しんでいたのであったが、そうもいっておれなくなったのであった。

安次郎は、授業に臨んでは、教師用教科書に示されたこと以上には口にせず、余計なことはしないようになって行き、教科の研鑽といえば書道・習字と理数科、それもとりわけ以前から関心の強かった算数の教育法のみに力を注ぐようになっていた。

長男が生まれたのは、かなり後になって太平洋戦争が激しくなって新聞、ラジオでは皇軍の華々しい戦果が連日報じられている頃だった。

しかし、間もなく、教え子の南方での死が報ぜられるようになった。上級学校へ進学していた何人かの教え子が、学徒動員で出陣していった。神風特攻隊が、片道分の燃料を積んで出撃していったことを聞いたときに、安次郎は、それがよりどころ

とする思想など、不条理以外にあり得ないと思った。しかし、安次郎は事実判断と価値判断が別であることはありうることで、日本という国に生まれてきた以上、皇祖高宗の遺訓に背くことはありえず、それに従い仮に滅ぶといえどもそこには美が保障されている、と自らに言い聞かせていたのであった。

十九年になると、他の多くのスポーツ大会とともにプロ野球も中止になっていたのだが、師範の野球仲間から、沢村が死んだ、と伝えられた。安次郎は、十年前の草薙球場におけるアメリカチーム相手の沢村の快刀乱麻を思い出したが、その豪腕も戦場でのアメリカ軍相手では何の役にも立たないわな、と思うのであった。戦後になって知らされたことであるが、沢村栄治は三度目の応召で、南方への転戦中、台湾沖で、輸送船が敵の潜水艦に沈められ戦死した、とのことであった。その他、多くの野球選手も戦場で命を落としていった。

H市の上空に敵の爆撃機が現れたのは、昭和二十年六月のことであった。政府は、米軍が上陸してきたならば、竹槍で追い返すのだ、と信じられないような（とは、口に出さなかったが）訓練を命じていた。実際に沖縄には米軍が上陸し、八月には広島、長崎に新型爆弾が投下され、満洲にはソ連軍が押し寄せていた。そして、安次郎の信じたくなかった敗戦が八月十五日に実際のものとなった。

戦後の大転換が始まった。マッカーサーをかしらに頂くGHQは、軍国主義の一掃を図るためとして、財閥解体、農地改革をはじめ、一連の民主化措置を進めた。教育改革をも急速に展

開した。アメリカから来た教育使節団が、教育の官僚統制を排除せよ、とか、六・三制が好ましいとかの教育民主化の勧告を残し帰って行った。

しかし、国の指導者が真っ先に考えたことは、国体の護持であった。その年の九月に出された「新日本建設の教育方針」は、世界平和、科学的考え方とともに国体の護持をうたっていた。科学的考え方と国体の護持がどう統一できるのだ、と疑問を呈する声もあった。学校現場では、緊急な措置として墨塗り教科書が使われたのであったが、そこでは、軍事や戦争に関する部分は墨が塗られても、国体護持については塗られなかったのである。

この時期、安次郎にとって嬉しかったのは、プロ野球がこの年の秋に復活したことであった。東西対抗戦が行われ、川上の赤バット、大下の青バット、藤村の物干し竿などが話題となり、混乱の中でも野球を愛する人たちが、いち早く野球を復活させたのであった。野球は平和でないとできないのだな、日本人も大らかに人生を楽しむ方法を忘れてはいなかった、と嬉しくなったのを安次郎はあとからもしばしば思い出したものであった。

十二月になると、教職員組合が結成された。戦前に各種の民間教育運動をしていた教師が中心になったのであった。この組合には教頭、校長さえも入ることが出来るのであった。終戦の年の秋、安次郎は教頭に持ち上がり、翌二十一年の四月にはH市内のO小学校の校長になったが、安次郎は、組合には全く関心を示さなかった。翌年冒頭には天皇の人間宣言があり、極東

軍事裁判が始まり、農地改革がすすみ父も土地持ちになっていた。やがて日本国憲法の公布をみた。

このような短期間における急激な変化は、安次郎たち教員にとって必ずしも安易に着いていけるものではなかった。とりわけ、戦前の教育に生真面目に取り組んできた者にとってそれは戸惑い以上のものであった。

安次郎は思っていた。

「多くの同僚が手のひらを返すように、あの戦争は間違っていた、これからは民主主義の社会だ、と言っている。しかし、俺は苦悶の中であの戦争に崇高な意味を見出し、天皇陛下の御心のままに子供たちを教育し、そのうちの多くは戦場で鬼になってまで国を守ろうとし、帰らぬ人となった子供も少なくない。そんなに簡単に世の流れに従った変身が出来るものではない」と。

ある日、父母のもとに安彦の戦死の通知が届いたと知らされた。遺品として届けられたものは、遺髪だけであった。

「安彦が召されただけん、お前が家を継ぐことになるで、ええか」と、葬儀が終わったとき父は安次郎に言った。

「当然だけん、親爺もまだ働けそうだし俺はしばらく教員を続けていても良いずら？」

「ああ、しばらくはなあ。んでも、定年になったら百姓をやれ」

安次郎は、教え子たちが戦場におもむくのを見送り、そのうち何人かは死んで帰ってこなかった、そんな教師として、また、自分が教員になることを後押ししてくれた安彦が戦死した、そ

の家族の一員として、改めてこの戦争が何だったのかを考える時間が日に日に増えていった。しかし、それらの死にまともに向かい合うことはなかなか出来ず、それを避けては抽象的なことばかり考えていた。

「すめらみくには滅びないと思っていたが、これは滅びの始まりだろうか。たとえ滅んだとしてもそれは美となって現れると思っていた。今、何か美として甦ろうとしているのだろうか」安次郎の脳裏に浮かぶイメージは何もなかった。しばらくすると、

「天皇陛下は神ではなく人間であるという宣言をお出しになった。しかし、ご健在であらせられる。天皇陛下のためにといって戦場に行った兵隊のうちのかなりが死に、多くの街が焼き尽くされた。今こそ、天皇陛下が新たな蘇りを実現し、美しいまほろばを甦らせてくださるのかも知れない」と思ったりするのだった。

「天皇陛下は、極東裁判でも罰せられることはない、と伝えられる。わが国は、歴代の天皇を父と仰ぎ、国民が全体家族のように暮らし、戦（いくさ）を戦ってきた。この事実は勝ち負けに関係なく認めることができる。戦において、兵や民が死んだとしても、戦における死は、敵味方を問わずおのずからなる勢いとして避けられないのではないか。多分、責任は誰それに問われるものではないのではないか」などと考えると、安次郎は、何となく心が落ち着くのだった。しかし、次の日になると

「安彦の戦死公報が届いた後しばらく、おふくろはほとんどし

ゃべらなくなっていた。戦争に行ったんだから、ある程度の覚悟は出来ていただろうが、自分が腹を痛めた子の死ともなると母親には耐え難いものがある。俺も今やふたりの子の親。親の気持ちは分からないわけではない。おふくろは、これからもずっといつまでも安彦のことがことあるごとに思い出され、その度に、計り知れない悲しみに襲われるにちがいない」と母の心の内を想像して胸が痛むのだった。

そんな思いを巡らせているうちに、世間では、教育基本法が制定され六・三制教育が始まった。「学習指導要領」も発表された。すでに、新しい日本史教科書「くにのあゆみ」は昨年秋に作られており、二十二年になると「あたらしい憲法の話」が刊行され、そこでは戦争放棄などが丁寧に解説されていた。二十三年六月十九日には国会の決議で教育勅語が失効した。高校向けに「民主主義」が出されたのは昭和二十三年であった。それらを読み、同僚と意見交換をしても、安次郎は、

「憲法で国の主権は国民にある、といっている。しかし、一方で、天皇は国の象徴と書いてある。象徴というのがなかなかむずかしいが、どうやら今まで通り、天皇陛下を国民全てが敬うことには変りがないらしい。やはり、日本は天皇中心の国、と考えればよいのではないか」と天皇陛下に対するこだわりが消えないのであった。

教職員組合の分会が〇小学校にも結成され、安次郎は、管理職としていやがうえでも対応せざるを得なくなってきた。分会としても非組（非組合員）の校長ということで、かなり攻撃的

に問題をぶつけてくることもあった。二・一ゼネストの前などには、組合員が校長住宅を監視するなどかなり緊張した状況になったが、直前にマッカーサーからの圧力によりストは中止され収まった。この時期までの労使間はおおむねは友好的な関係のもとで事が運ばれていた。

昭和二十二年には、安男が、郷里の村の中学校で社会科を教えるようになっていたのであるが、隣村から嫁を迎え所帯を持った。嫁は、畑仕事には慣れていて、父の力が衰えた分を補って余りがあった。そのおかげで父は舟で内海に漕ぎ出す回数を増やすことが出来、安次郎は少し安心した。

昭和二十三年になると、中国大陸では毛沢東の率いる中国共産党勢力が全国を制する勢いとなり、世界情勢は、ソ連、中国を中心とする社会主義国が大きな勢力を形作り欧米の資本主義国がそれに警戒の色を強めていた。アメリカは、日本を反共の砦とするとして、日本の再軍備を模索し始めた。その頃からは、いったん大きな流れになっていた民主化も後退を始め、二十五年の朝鮮戦争開始とともに、警察予備隊が作られたのであった。教職員組合は、再軍備には猛反発を示し、他の労働組合や平和団体などと力を合わせて運動を繰り広げた。二十六年には第一回の教育研究集会が開かれている。

H市と郷里の村との間は、最近では日に三往復のバスが結んでいて片道一時間余りで行き来が出来た。安次郎は春夏冬の長期休暇には家族を伴って里帰りすることが普通であった。この年の夏休みは、組合分会との協議があるというので、八月末ま

で数日を残して家族よりひとあし先に帰任することになっていた。明日帰るという晩、安男が声を掛けてきた。

「兄さん、学校へ帰ったら組合とのお付き合い、ご苦労さん。きっと、教育研究集会のことだよ」

「何だ、それは？」

安男は、組合結成とともに組合員になっていて分会の役員もやっていた。

「うん、兄さんもそうだけれど、今、教員は戦時中の教育を通して、大勢の教え子を戦場に送り多くの尊い命を失う羽目になっただろう。教育の場が、二度とそんな風にならないようにって、教員自身でもう一度考えておこうと始まった取り組みなんだよ。民主教育を掛け声に終わらせないで、どんなことをやってくべきか、いろいろな角度から考えようとしているんだ」

「そんなこと、組合の仕事か？教育そのものの中で考えることだろう。組合は、生活条件や校内の労働条件を考えとりゃ、それでいいんじゃないのか」

「そりゃ、そういう意見もあるんだけどね。戦時中のことを考えると、それだけじゃ、いかんのじゃないか、と。きっと、お宅の分会から、分会や市段階での集会などの説明と、それらへの参加に対する要請があるんだと思うよ」

「そうか、まあ、よく聞いてみることにしよう」

ー小学校の校長室では、分会書記長が進行役になって組合との協議の場が始まっていた。話題は、安男の言ったとおり教育

研究集会への取り組みについてであった。一般的な趣旨が説明されスケジュールが示され、それらへの協力が要請された。集会は、十一月に栃木県日光であるということで、往復の旅程を考えるとほぼ一週間を割くことになる。そこで、今から準備して授業の進行に可能な限り支障がでないようにするため、労使で今から協議したいという申し入れであった。安次郎は、安男から少し聞いてはいたが、その趣旨が何となく気になっていたので、分会長の藤沢先生に問いかけた。

「ところで、説明いただいた趣旨にある『教え子をふたたび戦場に送るな』のスローガンについて、もう少し詳しく教えてくれないかな」

「実は、そこんところがいちばん大切な点なんです」と藤沢が話し始めた。

「戦時中の苦い反省からなんです。教育勅語は言うまでもないと思うんですが、教育の仕方にしてからが、教師用教科書に全てを任せてその通りオウム返しに教えているのはそもそも教育の精神にもとるんじゃないか。教師が、自ら考えて自分のこととして創造的な教え方を身につけないと、自立した創造的な人格を育てることなんか出来ないんじゃないか。そういった反省、勿論それだけじゃないんですが、代表的にはそういったところに立って、教員自身が生活条件や労働条件だけでなく教育実践についても考えよう、組合がその場をみずから作っていこうというわけなんです」

安次郎は、戦時中、国史の授業などと違って、できるだけ自

分の考えで教育実践が出来る算数などに関心を集中したことなどを思い浮かべていた。藤沢は続けた、

「それと、何よりも、我々が戦場に教え子を心ならずも送り込んでしまった、いや、心ならずもなんて言えないんです。時間を掛けてしっかり向き合って教員全員が反省しなきゃいけないんです。校長、こんな詩を作った教師がいるんです、高知県の竹本先生という方なんですがね。題は『戦死せる教え児よ』というんです」藤沢は、手許の紙を見て読み始めた。

「逝いて還らぬ教え児よ／私の手は血まみれだ／君を縊ったその綱の／端を私も持っていた」

安次郎は、天井に目線を移しながら聞いていた。

「…／逝った君はもう還らない／今ぞ私は汚濁の手をすすぎ／涙をはらって君の墓標に誓う／『繰り返さぬぞ絶対に！』」読み終わると、その場にはしばしの沈黙が拡がった。安次郎は瞑目したまま動かなかった。沈黙を破ったのは、最近母親になった吉池先生だった。

「これに母親としての心情を重ねると『繰り返さぬぞ絶対に！』は、もっと強い叫びになるんです」

藤原が続けた。

「それなのに、主権在民の憲法を議論した舌の根の乾かないうちに、隣では戦争が始まった、内では警察予備隊が作られた。わたしたちは、この動きをとても危険だと感じるのです。個人の価値と尊厳を基本にする教育のあり方を、今こそ深く研究しようと思うんです。これは、校長先生としても同じお気持ちな

のではないでしょうか」

「私には私なりの考えがあるがね」と安次郎は応じた。安次郎は、組合に先を越されたという気がして少しくやしかった。戦後の教育改革なるものに身を置きながら、他人からいわれるまでもなく戦時中の教育が良くなかったと毎日のように思われ、忸怩たる気持をいかに整理しようかと苦闘する日々であった。組合にいわれる前から俺だって考えているわい、と強がりをいいたくなる思いだった。

「そこは、立場の違い。それぞれの立場で、そのあたり、やってけばいいんじゃないかね」

「じゃ、校長、基本的にはご理解いただけたということで…」と書記長が引き取った。原案通りのスケジュールに沿って、授業に出来るだけ影響しないような段取りを教頭と集会参加予定者と書記長とで追って相談することが確認され、この日の協議は終了した。

安次郎は、喫茶店の室内に静かに流れる音楽を聴きながら、さっき耳に入ってきた「あざみの歌」を始めて聞いた戦後のある日のことを思いだしていた。

安次郎は学校から家に帰ると、プロ野球中継放送を聞こうとラジオのスイッチを入れた。この年からＮＨＫがプロ野球の中継放送をするようになっていた。贔屓の巨人が藤本投手や川上選手の活躍で好調であり、東急の大下選手もホームランを盛ん

に打っていた。しかし雨で試合が中止になったのか、ラジオからは野球の中継ではなく歌が流れていた。次は「あざみの歌」、歌うのは伊藤久男、とアナウンサーが言っていた。それを聞くともなく先ほどからの考えは進んでいった。

「大東亜戦争は確かに敗戦で終わった。歴史の審判だったかも知れない。多くの同僚は、これからは民主主義の社会だ、と言っている。しかし、全てが間違っていたはずはない。俺は懸命に勉強してあの戦争に崇高な意味を見出し、天皇陛下の御心のままに子供たちを教育した、そのうちの多くは戦場で帰らぬ人となった。そんなに簡単に善悪の基準が変わってたまるか。気紛れな世の流れに従った変身が出来るほど俺は不節操ではない」

考えながら伊藤久男のしっとりとした歌声に徐々に引き込まれていった。

「高嶺の百合の　それよりも
　秘めたる夢を　一筋に
　くれない燃ゆる　その姿
　あざみに深き　わが思い」

聞きながら安次郎は、師範学校に行く話をお寺の和尚さんから聞かされた時、寺の庭で見たアザミの花を思い出した。保田輿重郎の本のカバーに描かれたアザミの花を思い出した。すると、彼の心には、自分の生き方は、大正から昭和への歴史の流れの中で一歩一歩自力で作り上げてきたものであるという強い思いが湧いてきた。

「俺は、勿論、教育基本法に従った教育をやっていくとしても、

従来のままの考え方で行くことにする。ひとはひと、我は我だ」

安次郎は、その時、戦後に生きてゆく方向が固まった、と今、サントスのコーヒーの味とともに思うのであった。そして、教師としての生き方に関して安男と話し合ったときのことを思い出した。それは、第一回教研集会があった後の正月休みだった。

安男は、時に安次郎を批判するような話題を言い出すことがあった。その日も安男がいきなり話し出した。

「兄貴、太平洋を航海する船は、海図の上で自分がいる場所を例えば星や灯台などを便りに特定しているから目的の港を見失わない。」

安男は、社会科教師として地理の授業を受け持っていた。

「人生行路にもそれが必要だと思うんだよな」

「いきなり、何を言いたいんだ？」

「終戦を挟んで世の中すべて大変わりなんだけど、その後もみんな結構右往左往している。教育だって、終戦直後は、新憲法で戦争放棄したって、それを子どもたちにもたたき込んだ。ところが、共産中国が出来た途端に、今度は再軍備をはじめ、戦争することを考え出す。そこんところの矛盾をどう考えて子どもたちに教えたら良いんだろうね」

「警察予備隊のことなら、ありゃ、戦力じゃないんだろう。矛盾してないさ」

「そんなの、ことば遊びだね。これからなし崩しに戦力を強化

して行くに決まってる」
「じゃ、どうしろっていうんだ」
「教員が、しっかりした座標軸を拵えなきゃダメだね。それがないと、歴史は繰り返される」
「アホか。どこにあの戦争をもう一度やろうとするものがいるもんか」
「僕あ、スターリンも毛沢東も、今に原爆を持つようになると予想するね。そうすれば、アメリカとソ連、中国は常に戦争前夜。そんな時に、アメリカの庇護を受けてる日本が、というか日本政府がといった方が正確だろうが、それと関係なしに超然としていることなんか考えられない。そんな時に、政府はやはり教育を重視して、政府のイデオロギーを押し付ける教育をやらせようとする。その時、教師自身が、しっかりとした座標軸を構えて、毅然とした行動をとらなかったら、戦前の二の舞になりかねない。」
「その座標軸ってのは、何だ」
「まだ、良くは分からん。でも、自分が座標系のどこにいて、政府がどこにいて、両者の関係はどうなってるのか、それが分かっていることが絶対必要だ、ということだけは言える。それをしっかり拵えることが、僕のこれからの課題だと思うんだよ」
「どうすれば、それが見つかるんだ」と安男に聞きながら、安男の言うことは、時事問題はともかくとして、算数が得意な安次郎には座標軸を持つ必要性は分かる気がした。安男も、しばらく答えられないでいたが、

「もう一度、『戦争』と向き合ってみようと思う。多分、かなりな時間がいるだろう。一を知るには十も二十ものことを考えなきゃならんだろう。でも、やってみようと思う」と答えた。安次郎の脳裏には、また、和尚さんのマクワウリの例えばよみがえった。

「そうか、まあ、がんばってみろ」と言ってその話は終わりになった。

安男のいうことには不思議と共感を覚えるのだった。算数教育に関心があった安次郎には座標系で物事を考えるということは分かりやすかった。考えてみると、自分のこれまでの座標軸は、自分自身か国家か、を縦軸にすれば、横軸には、皇祖高宗の遺訓という軸があったような気がする。多くの人は日本にひたりきって国家に奉仕し、あるいは振り回されて戦争の人生を歩んできた。安次郎は、日本の文化を尊いものとしつつ、出来れば国家に振り回されたくはなかったが結果として国に身をゆだねて来たといわざるを得ないだろう。しかし、その座標系の妥当性に確信はなかったし、それが妥当であったとしても、敗戦を経て全てがあやふやになって、今や、大波に揉まれて自分のいる場所がよく見えないのは確かであった。

喫茶店では遠くからデモ隊の歌声が聞こえていたが、安次郎の意識からは、窓外のプラタナスの並木もビルも、そして静かに流れる音楽もしばらくの間すっかり消えて、明治後半から大正、昭和の出来事がめまぐるしく再現されていたのであった。

ふっと我に返った安次郎の耳に再び「あざみの歌」のメロディーが聞こえてきて、思いは、

「俺の拠り所は、結局ここしかない」というところに行き着いていた。彼はそれを反芻していた。

「自分自身の純粋経験というのは、結局、青春時代にひたすら追い求めた所にしかあり得ない。教え子が戦場では他人の命を奪い、何人もが死んでいった。それらを飲み込んで納得させてくれるような絶対的根拠なんてものはあるのか。いろいろ思っては否定に否定を重ね、結局残ったのは歴代の皇祖高宗の遺訓。それ以外にはあり得ない。終戦後、戦前の天皇は否定されたようにみえるが、全否定されたわけではない。新憲法にも象徴として明記され、東京裁判さえ、天皇陛下の戦争責任は問えなかったではないか。日本と日本人にとって天皇は全ての拠り所である」

言い方は多少変われども、安次郎の考えるところは、結局、この想念のまわりを回っているに過ぎないことを彼は自覚していた。それは、彼の思考力が進歩しなかったというよりは、青春の時代にあまりに強く刷り込まれたことだからに違いなかった。彼は、もう最後までこれでいくことになるのではないか、と思った。

「しかし、安男は違うことを考えている。この間は、この安保条約が、日米共同作戦の義務を日本に負わせるもので、日本を再び戦争に巻き込むものだから絶対阻止しなければならん、『教え子をふたたび戦場に送るな』だ、などといっていた。俺だっ

て、戦時中みたいなことになりそうなときには、デモでも何でもやるわい。そのときにゃあ、戦時中のわしらの苦衷をみんな吐き出してでも阻止してやるさ。なあに、戦時中と比べりゃ、平和そのものだ。まあ、これからも安男とは、機会を見つけて議論して行こう」などと思うのだった。そして、彼は、

「村に帰って、百姓しながらゆっくりかんがえてみるか」と口に出して小声で言うと喫茶店のドアを開けて外に出た。安保反対デモの声がまだ小さく聞こえ、彼の頭の中には繰り返して「あざみの歌」が流れていた。

安次郎は、結局、戦時中のことも彼の人生をも語ることなく、二十一世紀を目前に九十五歳でこの世を去った。以下は、葬儀における長男安一の挨拶の一節である。

「親爺のほとんど二十世紀そのものという生涯は、終戦を挟んで全く違う環境のもとのそれでした。それにもかかわらず、頑固に自分を貫いた一生だったように思えます。同時に、右往左往と迷い続けた一生だったようにも見えます。頑固に迷い続けた親爺の生き様を、私は、二十一世紀にあらためて見つめ直してみようと思っています」